

〔論文〕

フレーベル教育学における「予感」と 象徴遊戯論に関する一考察

角野 雅彦*

— 目 次 —

はじめに

1. 予感と象徴

2. フレーベルの遊戯論とその展開

3. 家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』

おわりに

キーワード：予感、象徴、遊戯

はじめに

フレーベルは、ペスタロッチと並んでドイツ語を母国語とする近代の天才的な教育学者と位置づけられている。周知のように、フレーベルの幼稚園の思想は全世界に浸透して名声を得た。ドイツ語のキンダーガルテン (Kindergarten) という名称は、多くの国でしばしば翻訳されないままの外来語として取り入れられており、その意味においてたしかに、フレーベルは近代就学前教育の創始者であるといえる。しかし、それは通常きわめて外面的な形式上の引き継ぎに過ぎず、本来の意味、すなわちフレーベルが幼稚園において意図した理念とその背景は、広範にわたって知られぬままにとどまっており、それは新たに獲得されることが必要である。

* Masahiko KAKUNO 本学社会福祉学部准教授（保育原理、保育者論） 教育学博士

フレーベル教育学のより深い内実、そこにはドイツ・ロマン主義の思潮が満ちている。ロマン主義の底流に流れているものは、内面性の重視、感情の尊重、想像性の開放、根源への回帰といった特性であるが、まさにこれらロマン主義的要求が最も純粋に実現される場所は人間教育の場においてであることをフレーベルは発見し、感動し、そして教育の根本的革新を目指したのである。すなわち、生の損なわれざる諸根源へと回帰するロマン主義の道は、教育の失われることのない目標を表しているとフレーベルは考えた。しかし、彼の教育学の深い意味におけるロマン主義的諸前提がこれまで注目されることは少なかった。そればかりか、デューイ (John Dewey, 1859~1952) らによって「新教育運動」として展開された進歩主義教育の流れを引く人々は、それを邪魔な飾り物として無視し、あるいは切り捨てようとしてきた。ところが、このロマン主義の諸前提からしてのみ、フレーベル教育学の深みは把握できるのである。

フレーベルをロマン主義の精神に生きた教育者として、彼のより深い形而上学的背景との全体において分析した先駆的研究として、ボルノーの『フレーベルの教育学』(Otto Friedrich Bollnow, *Die Padagogik der deutschen Romantik : von Arndt bis Fröbel*, Stuttgart 1952) が挙げられる。この原書は教育史全5巻の第4巻であり、本論は3部から構成されていて、第1部「ロマン主義教育学の基礎」では主としてアルントとジャン・パウルクが、第2部「国民教育学の思想」では主にフィヒテとヤーンが取り上げられ、最後の第3部で、「ドイツロマン主義教育学の華、フリードリッヒ・フレーベル」においてフレーベル教育学が詳述されている。さらに彼の弟子には、K・ギール『フィヒテとフレーベル』(Klaus Giel, *Fichte und Fröbel, Die Kluft zwischen konstruierender Vernunft und Gott und ihre Überbrückung in der Padagogik. Anthropologie und Erziehung. Bd.3*, Heidelberg 1959)、そしてドイツにおけるフレーベル研究の第一人者であるH・ハイラント『フリードリッヒ・フレーベルのシンボル界』(Helmut Heiland, *Die Symbolwelt Friedrich Fröbels*, Quell & Meyer, Heidelberg 1967) がある。後者はフレーベルの象徴概念について詳述したものである。H・ハイラントの研究の特色は、1970年までのフレーベル研究に関する完全な文献解題 (Helmut Heiland, *Literatur und Trends in der Fröbelforschung Ein kritischer Literaturbericht über Quellen und Sekundärlit*

ertur von den Anfängen bis zur Gegenwart mit vollständiger Bibliographie zur Fröbelliteratur, Belz Verlag 1972) や以降のフレーベル研究にみられるように、フレーベルの資料についての徹底的な吟味とその確証による解釈にある。文献解題やフレーベル書簡の索引作成といった、地味な基礎的研究を土台に、フレーベルの直筆書簡、日記、草稿等の解説を通じた極めて精緻な研究を遂行している。

国内では荘司雅子による『フレーベルの教育学』（1944）『フレーベル研究』（1953）『フレーベルの生涯と思想』（1985）等が、フレーベルに関する網羅的研究として有名であるほか、フレーベルの遊戯観に関する小笠原道雄論文を所収した『ロマン主義教育再興』（1986）が興味深い。小笠原は、『フレーベルとその時代』（1994）、『フレーベル』（2000）など、その他の著作においても同様のテーマを取り扱っている。なお同氏は、シュプランガー『フレーベルの思想界より』（1983）、H・ハイラント『フレーベル入門』（1991）といった、主にドイツのフレーベル研究書籍の邦訳でも定評がある。

本稿は、こうした一連の先行研究を踏まえながら、第1節でロマン主義精神を背景に生まれたフレーベル教育学の中心概念である予感と象徴を考察する。第2節では、予感と象徴の概念が彼の遊戯論の中でいかに展開していくかを、史実的に述べる。第3節では、フレーベル教育思想の真髄ともいえる著作『母の歌と愛撫の歌』を取り上げ、晩年のフレーベルがたどり着いたロマン主義的人間観、教育観、そして世界観をみていくこととする。

1. 予感と象徴

(1) フレーベルとロマン主義

幼稚園 (Kindergarten) の創始者フレーベル (Friedrich Fröbel, 1782～1852) の教育学は、ロマン主義の全般的展開の一部として理解されなくてはならない。フレーベルは、自身の教育学の確立によって既存の教育の根本的な革新を目指したのであるが、その動機は、彼のロマン主義的思考への傾倒という点から多くを説明することができる。

ここでのロマン主義 (Romantik) の概念は、しばしば二重の意味で用いら

れている。狭義的には18世紀の末頃にドイツ文学において成立し、その後当時の哲学や様々な科学へも広がり、いくつかの局面を経て19世紀中旬まで続くが、やがて現実主義的な諸潮流に取って代わられた運動をさす。この運動は、フランスやその他ヨーロッパ諸国へも浸透した全ヨーロッパ的運動でもあった。そして広義的には、ロマン主義的（Romantisch）というように、一般的な精神態度を表す意味で使用されることがある。

その狭義の意味において、さらにドイツにおけるロマン主義を特徴づける場合、ロマン主義運動を時期的に区分し、初期ロマン主義（イエナのロマン主義）、盛期ロマン主義（ハイデルベルクのロマン主義）、後期ロマン主義（ベルリンのロマン主義）といった三つの段階に区分することができる。このようなロマン主義運動の発展段階からみると、フレーベルは世代的には後期ロマン主義に属しているが、フレーベルの教育学は、強く初期のロマン主義の思想に影響を受けているといわれる。ボルノー（Otto Friedrich Bollnow, 1903～1991）も、フレーベルをいわば「遅れてきた」思想家である、と位置づけている。

その彼がたいそう心を打たれたロマン主義の文学は、厳格な形式を軽蔑し、断片的なものを愛好し、憧憬の感情をとまなう傾向を有していた。その一人、ドイツ・ロマン派の代表的詩人であるノヴァーリス（Novalis, [Friedrich Leopold Freiherr von Hardenberg] 1772～1801）は、作品に多くの暗喩や象徴を散りばめており、その思想は神秘主義的傾向がきわめて強いとされる。ノヴァーリスはフレーベルが最も影響を受けた詩人・思想家であるが、その著作集を読んだ青年時代のフレーベルは、

「この書物は私の精神の最も内部の最も隠れた動向と感情と直感とを私に明らかに、そしていきいきと知らせてくれた。私の精神と心情との最も深い部分にある憧憬と努力とは私の前に明らかにされた。この書物を手放すことは、まるで自分自身を失うように思った。そしてこの書物に書かれていることがらは、私自身の身に深刻に、そして痛切に起こってくるように感じられた」と、その深い感動を述べている。ときには理性に背を向け、人間感情の仄暗い領域や象徴的意味を扱うことにロマン主義の特徴があるが、元来ロマン主義的資質を備えていたフレーベルが、ノヴァーリスの書物に心を打たれたことは偶然ではないだろう。

こうしたロマン主義的思考は、やがて文学を超えて学問の世界にも広まり、やがて一大潮流を形成するようになる。シェリング (Friedrich Wilhelm Joseph von Schelling, 1775～1854) らのロマン主義の自然哲学および科学は、外的自然を究極的には精神的な出来事と理解するようにまでなった。歴史法学派のバッハオーフェン (Johann Jakob Bachofen, 1815～1887) は、隠された根源へと向かう態度から、神話と宗教の新たなより深い理解を目指した。また、文学の象徴的性格への関心から民謡とメルヘンが注目され、グリム兄弟 (Jacob Ludwig Karl Grimm, 1785～1863, Wilhelm Karl Grimm, 1786～1859) のロマン主義的言語学が展開された。シュライエルマッハー (Friedrich Daniel Ernst Schleiermacher, 1768～1834) は、宗教をすべての合理的形而上学及び一切の道德から厳しく分離し、宗教を「宇宙の直観と感情」としての独自の、非合理的な一定の領域として規定した。

フレーベルは、1826年の『人間教育』(Menschen-erziehung) での乳幼児期から学童期の教育に出発して、1844年の『母の歌と愛撫の歌』(Mutter-und Kose-lieder) における母親と生後最初の乳幼児の教育に至るまで、フレーベルの教育的関心は、ますます年齢の小さな子どもに対して注がれていった。そのため、元来は計画されていた『人間教育』の続編も存命中に書かれることはなかった。乳幼児期の教育こそが、まさに人間形成や教育制度の全体に対して最も強い影響を与えるとフレーベルは確信するようになっていったのである。こうした傾向もまた、より根源へと向かうロマン主義の態度の表れであると解釈できよう。その他、幼稚園をはじめフレーベルの考案したさまざまな教材や教授法一般を、本来の意義やより深い内実にそって理解しようとするならば、ロマン主義の全般的な展開を概観することが必要となってくる。

(2) 予感と象徴

フレーベルの教育思想は、神と自然、および人間との全き統一としての連関である「生の合一」(Lebenseinigung) を果たそうとした点に最大の特徴がある。フレーベルは、生の合一を了解させる心的機能として「予感」(Ahnung) を提唱した。予感とは、フレーベルの教育思想における最も基本的かつ重要な概念の一つである。人間には、旅先で偶然に見た風景の中に自己の人生の未来全体を感

じとったり、流行歌を通じて時代の大きな変化をおぼろげに感じるというように、個別的事象を通じて全体的事象を把握したり、生命のより高い段階を先取りする判断作用が一般的に認められる。このような判断作用は、科学的・客観的判断作用とは異なり、日常では勘の働きとして説明されるが、とりわけ未来の事象や未来の生との関わりで生じる場合、一般的には予感の働きとして説明される。

フレーベルは、予感とは人間の幼児期において最大限に働くと考えていた。子どもは、成人と比べて、遙かに強く未来の生や諸事象との関わりをもった存在であるがゆえに、予感の働きもいっそう顕著であると考えたのである。フレーベルは、子どもにおける予感の働きに注目し、経験の乏しい子どもが、幼児期、少年期、青年期と連続的に成長し発展していくためには、感覚や思考力だけではなく、予感能力の働きが重要な意味を持つことを明らかにした。子どもは人間の本質をまだ認識できないが、その本質を予感することはできると彼は確信していた。フレーベルの主著『人間の教育』の中では、

「学校生活を始めることには少年は、自己の精神的本質を知覚し、また神と万物の霊的本質とを予感するように思われる。そして彼は、かの知覚をいっそう明瞭にし、この予感をいよいよ実証しようと努力しているように見えるのである。少年は、この世界の内外に、自分におけると同様な霊が働いていて、世界は自分と同じく、この霊によって支配されているものであるという予感や期待や信仰を持って、外界に接近してゆくのである⁽¹⁾」

とある。

フレーベルは、そのような予感を呼び起こすための教育上の装置として「象徴」(Sinnbild) の持つ意味と働きをきわめて重視している。彼の考案した恩物(Gabe)は、子どもの予感を呼び起こすための仕掛けともいえる。予感能力の保護と形成を教育の重要な課題であると認識したフレーベルは、恩物においても予感能力を形成するための様々な工夫を凝らしている。フレーベルが考案した恩物は、具体的に与えられた子どもの遊戯の対象物であると同時に、より深い精神的意味が子どもによって把握され、それによって子どもが自己の心的機能を形成するのみならず、世界像の樹立に対する内容的な諸要素を獲得することを企図している。しかしながらフレーベルは、子どもが概念的形式を通じてそれらを獲得することを決して望んでいない。フレーベルが彼の教育活動を通じて展開した遊戯

は、子どもの悟性に向けられたものではなかった。むしろ子ども独特の精神性を考慮して、そこから出発するのが有効と考えたのである。

幼児期の子どもにあっては、総じてまだ、その自己理解と自己知覚において潜在的であり未活動状態に止まっている。そこでは、自己の内外の意識的な生に対してのおぼろげな予感があるのみである。だから、遊戯のより深い意義も、さしあたりただ無意識にぼんやりと子どもによって受け取られ、ただまさに予感されるにすぎない。しかし、フレーベルはまさにここから幼児期の教育を出発する。それは、子どもは世界を悟性的に把握する能力は持っていないが、情感的な予感の形式において、豊富な生命理解と世界理解とを獲得することができるという強い確信があったからである。すなわち、すべての事物は、まず無意識の形式をとって子どもの中に準備されて、のちほど概念的に解明されるのであり、生の究極的意味規範は、必然的にこのようなおぼろげな予感を經由して、のちに明瞭な意識にもたらされるのである。

このような精神的内容を具体的に知覚可能な形象に直観化したものが象徴であるが、フレーベルは、この象徴において子どもの生のすべてを理解する鍵が与えられているのだと強調している。同時に幼児期への教育的影響の可能性もまた、象徴の概念から解明されるのである。象徴においては精神的なものと感覚的なものが相互浸透していることに、認識に対する象徴の意義が存在している。

感覚的に与えられた対象をただ直観することによって、子どもは概念的な明確さをともなうのではなく、情感的にぼんやりと深い意味を感じとることができる。このように子どもは、その深い意味をただ予感するのみである。すなわち、象徴を前にして、子どもは意味を完全な概念的明確性へとともたすことができる以前に、先ずそのより深い意味を予感という心的機能の働きによって内面に取り込むことができる。その意味で、象徴と予感は相互に対応しあうものであるといえる。したがって、象徴への誘導は、子どもの予感を保護する道なのである。

また、ここでいう象徴とは、概念的にはまだよくわからぬが、個々のものに即して全体を把握するという予感に働きかける性質を有していなければならないとされる。予感は、直接的に与えられた表面を突き破って進むことによって、感覚的直観をより深い精神的意味の拡大へと拡大するものである。もし予感をともなわないならば、対象への直観も無意味な行為となる。フレーベルは、「予感をと

もなわない直観は空虚な外皮にすぎない」と述べている。つまり予感をともなわないならば、対象は単なる記号 (Zeichen) にすぎないのである。したがって象徴と記号とは厳密に区別されなければならない。

というのも、予感されたより深い意味を背景にしてのみ、直観もまた真の直観であり得るからである。このように予感は現象的な皮相の背後に隠された深みを感知することができることによって、予感は象徴把握と不可分に結びついている。象徴は、それがより深い予感を呼び起こすことができるからこそ、象徴なのである。逆にいえば、予感によってのみ、象徴は理解されるのである。⁽²⁾

あるひとつの表現が、ある既知のものを代用し、あるいは略称している場合、それは象徴ではなく記号である。これに対して、象徴は既知のものの単なる代用ではなく、ある未知のものを表現しようとして生じた最良の形式であり、その他にはこれ以上適切な表現法が考えられないという場合を条件としている。

分析心理学の創始者であるユング (Carl Gustav Jung, 1875~1961) もまた、象徴の持つ創造性の意義を強調し、それを単なる記号と区別することを強調している。ユングの例に従うと、十字架を神の愛の象徴だと説明するのは、むしろ記号的な説明である。それを神の愛という言葉で説明し去ってしまうならば、むしろ十字架というほかにも意味をもつようなもので表現する必要もないし、この場合、十字架は一つの記号となる。しかし、十字架を、これまでは知られることのなかった超越的なあるもの、の表現としてみるならば、この場合の十字架は象徴的なものとなる、⁽³⁾としている。

このようにフレーベルは、予感およびそれと不可分に結びついている象徴の働きを重視したのであるが、それは、究極的にはそれらが人間を神的統一へと導く宗教感情の源泉であると考えたからである。フレーベルは、論文「1836年は生命の確信を要求する」において、

「最も内的な条件としては、なによりもまずとくに人間性のうちに宿る神性を感じることによって生き生きと貫かれた状態にあることである。すべてのものを貫いているその確信と誠実さとは、人間性のうちにみられるあらゆる感情、思考および行為の決定者であり活動基盤であり、またそれらに秩序をあたえるものでありそれらの評価の基準である」⁽⁴⁾

と述べている。ここでは、内在する神性を意識化するというよりは、ただ感じる

ことの方がより重視されていることがわかる。たしかに、人間の課題は、さしあたり予感的に把握された神的本質を、完全な意識、生きた認識、明瞭な洞察へともたすことではあるが、ここで獲得された意識化された認識はやはり、それがつねに新たに予感の力を得ることによって、つねに新たに意識の明るみから予感の暗闇へと回帰することによってのみ、その内的活力を維持するのである。⁽⁵⁾

予感の暗闇への回帰という見解は、根源への回帰、すなわち人間の手によって汚されていない出発点への憧憬という、ロマン主義教育の思想に深く根ざしたものと見える。人間が自己の生を神的なものとして充実するには、意識の明るみだけでは不十分であり、無意識的な心的機能である予感の中に存在する本能的確実さが必要となる。つまり、隠された究極根拠の把握としての予感と生は相互連関的に結びついたものであり、本来的に相互に不分離の関係にある。

(3) 根源への回帰

子どもの認識は、まだ無意味な感覚知覚を素材として始まるが、やがてこれらの知覚があとから悟性によって秩序立てられるというのではない。最初に、さしあたりまず全体を一つの意味ある形象物として捉えるというあいまいな把握があるのみであり、認識の課題は、予感しつつ把握されたものをはっきりした明確さにまでもたすことである。それでは予感によって把握されたものは、やがて明確さが可能となるまでの知的成長の過程の中で意識の深い根源から消失するのだろうか。

ボルノーによると、それは決してあり得ないという。

「予感はまだ、けっして明確な知の中に余すことなく解消されることはない。いつでも暗い基底が保存されている。それはどこまでも秘密に満ちたものであり、われわれの一切の認識は結局のところその中に基礎づけられており、それなしには一切の認識は単なる合理性の中で活力を失うのである」。⁽⁶⁾

しかしわれわれは、成人後、日々の仕事や生活に追われ、子ども時代の活力を失っていくことが多い。暗い基底に触れる機会はあるのだろうか。そこで想起されるのがフレーベルの繰り返し掲げたモットー、「さあ、わたしたちの子どもらに生きようではないか！」(Kommt, lasst uns unsern kindern leben!)である。これは自分たちより弱い存在である子どもたちに思いやりを込めて振る舞おうと

いう意味ではない。この言葉は、表面的なものとなってしまった生活の中で硬直した成人たちが、子どもたち、いわば根源的な存在との関わりの中で、みずからが再び若返る、根源への回帰という意味を持っている。

つまり、われわれ成人たちは、子どもたちとの関わりの中で、自分たちの表面化した日常から引き離されて、ときに根源的な生へと戻らなくてはならないのである。その意味において、ロマン主義的理想が最も純粹に具現化される場所は、家庭および教育の場においてであろう。教育は、子どもたちを彼らの人格性の発達に向けて援助し、かつてそうであったように成人の生活に協力しつつ、これに参加することができるようにするという課題を持つだけではない。教育は、個々の教育する人間みずからが、おのれ自身の根源的な性へと連れ戻される最良の機会となるのである。さらにそれにとどまらず、教育は繰り返し硬直化するわれわれの文化そのものが、根源的な生動性を再度取得する社会的装置となるのである。すなわち、教育によって人間の文化は若返ることができる。

2. フレーベルの遊戯論とその展開

(1) 『人間教育』の遊戯論

ボルノーによれば、フレーベルが遊戯の教育上の重要性をはじめて認識したのは、イフェルテンのペスタロッチのもとに滞留していたときのようなものである。しかし、遊戯に関するフレーベルの見解が、その最初の十全な展開をみるのは『人間教育』においてである。⁽⁷⁾ 幼児初期の遊びについて、フレーベルはこうに述べている。

「遊ぶこと、または遊戯は、この期における人間の発達、すなわち児童生活の最高の段階である。なぜかといえば、遊戯とはその言葉がすでに示すように、児童が自己の内面を自ら自由に表現したもの、自己の内面的本質の必要と要求とに応じて内面を外に現したものだからである。遊戯はこの期における児童の最も純粋な精神的生産であり、また同時に、人間生活全体の模範ともいうべきものである。あるいはさらに、人間およびすべての事物の内奥に秘められたる自然的⁽⁸⁾生活の模範である」。

もっとも、この時点でのフレーベルは、教育手段としての遊戯を「労作」と「授

業」に続いて重要なものと考えていた。同書の中で特徴的なことは、遊戯を子どもの発達段階に即して考察していることである。『人間教育』を貫く思考過程の中で、発達の観点と哲学的観点の両者が混在したかたちで存在するのは周知のことであるが、とくに遊戯論に関していうと、発達の視点が主となっており、子どもの生命の発展を乳児期、幼児期、少年期等、それぞれの発達段階によって質的に異なるものとして捉えると同時に、「内界を表現して外界となし、外界を摂取して内界となし、両者の間に統一を見出すこと」とあるように、内と外との関係を視座として各時期を把握しようとしている。

『人間教育』の記述に沿って各発達段階の遊戯を考察すると、乳児期の段階では、身体感覚や四肢の使用が問題であり、遊戯は純粋に身体機能的な意味においてのみ存在する。幼児期の段階において、遊戯は支配的な生命活動として登場する。フレーベルは、「この時期の子どもの遊戯は、高遠深長な意義のあるものであって、決していたずらごとではない」、「児童のどんな遊戯も、全生涯のいわば子葉である」という。さらには、「この時代の子どもの随意的遊戯の中に、すでにその将来の内部的生活の萌芽していることが明らかに認められる」、「それから後の全生涯の意義は人が再びその生命を去って死に至るまでも、全くこの幼児の時期にその源を持っている」というように、幼児期の遊戯の場面においては、将来へ向けた人生の萌芽が生き生きと活動し表出しようとしていることを認めている。

すなわちフレーベルは、内なるものを外に表現するという基本的衝動は、人間の生来的かつ本質的な欲求であり、したがって、人間を形成するということは、その衝動を保護し妨げないことであると考えたのである。そしてその基本的衝動の表れは、この時期の子どもにとって遊戯という手段を通じて達成される。もちろん遊戯という手段は、あくまでも「この時期の」という期間限定のものであり、それより後の年齢では、他の営みが遊戯にとってかわることが期待されているのである。

しかしながら、この時期の子どもにとって遊戯は生活と同義であるといえるほどの比重を占めている。「子どもの生来固有の素質に従って相違はあるにしても、根本的にはひとしくこの幼児期におけるその生活の仕方によってさだまるのである」ならば、遊戯は人間の生涯において途方もない意義を有しているといえるの

である。

ボルノーによれば、これらフレーベルの幼児期における遊戯論は、フィヒテ (Johann Gottlieb Fichte, 1762～1814) の思想に依拠するものであるとされる。それは、人間の道德教育にとって決定的なことは、その自発性の発達であるとする考えである。子どもは遊ぶ際にみずからが自発的であることへの喜びを体験するが、この喜びこそが将来の道德性の基礎となる。これが遊戯の意義なのである。⁽⁹⁾ それゆえにフレーベルは、「遊戯は、喜びや自由や満足や自己の内外の平安や世界との和合を生み出す」と考えた。

少年期の段階になると、フレーベルは遊戯論をもはや独立した問題とせず、遊びという事実、「単に活動のための行動」が問題なのではなく、「仕事のための、生産物のための行動」が問題とされる。幼児期では、

「子どもは家族のうちにあって両親やその他の家族の人たちを見ている。そして、その中の年長者が日常の生活において、また家族に関するいろいろの事情のうちにおいて、何か造り出したり、働いたり仕事したりするものを見ている」

というように、たしかに子どもは身近な観察を通して遊戯の素材を発見する。周知のように、幼児期における遊戯には家庭生活の模倣（ごっこ遊び）を主としたものが多くみられる。さらに、「この年輩の児童は模倣的であるから、自分が周囲に見ていることを自分でも実現してみたいと考える」ことから、フレーベルは、「幼年期においては子どものすることはただ活動のための活動であった」という。これに対して、少年期には「家庭での仕事の分担」というテーマが出現することをフレーベルは指摘し、よって「少年期の活動は仕事のための活動、結果を得るための活動である」とする。

「幼児の活動本能は、少年期に入れば発達して形成的、創造的衝動となるのである。そして少年期における児童生活の外部的現象はすべて、このような形成的衝動に帰するのである」。

遊戯が一見消滅して真剣な仕事が発現するという事実、これはすなわち、少年期がこの仕事を通じてさらに発展する時期であることを同時に意味している。

しかしながら、遊戯は完全に消滅したわけではなく形を変えて残っている。それは子どもの発達段階に応じてその性格を変えたに過ぎないのである。この時期

の子どもは、可塑性をもった素材、たとえば砂や粘土を非常に好むが、注目すべきは、ここでは素材が純粹に形成の材料として、つまりはじめて形づくられる「生の材料」としてみられていることである。すなわち、「少年は彼がすでに以前に自覚していたところの自分の力を感じながら、今だこのような材料を取り扱い、これを支配せんとするのである」というように、環境を意志に服従させることが問題となっている。「彼らは、何ものでもすべて、自分の形成的、創造的衝動に従わせようとする」とある。

このように少年期の遊戯に関するフレーベルの考えは、ロマン主義の影響よりもフィヒテの影響がはるかに強く感じられる。予感的に直観される世界の法則性よりも、環境を人間の改造意志に服従させることのほうが問題となっている。これらは、世界は義務遂行の素材であるとするフィヒテの「自由の観念論」と深く重なるのである。⁽¹⁰⁾

以上のように、フレーベルは『人間教育』において、子どもの発達段階に即応しつつ遊戯論を展開しているが、象徴遊戯論の端緒はまだ開かれてはいえない。『人間教育』における遊戯論を要約すると、遊戯それ自体は、諸々の力や敏活さを錬磨するという「力の展開」か、あるいは内面的な生氣や生命の喜びの純粹な「表現」のいずれかであると考えられているのが特徴的といえる。それらは具体的には、(1) 身体的な遊戯か、あるいは、かくれんぼのような聴覚を練習したり、色彩遊戯のような視覚を練習する、(2) 感覚的な遊戯か、あるいは盤上の遊戯などのような思考や判断を有する遊戯、(3) 知的な遊戯、のいずれかである。⁽¹¹⁾

(2) 象徴遊戯論

フレーベルの遊戯論は、1826年の『人間教育』までは、子どもの自己力と自己活動を促進して活動力を喚起するという側面からその意義を解釈するのが主であった。これら従来側面に対して、やがて第二の側面である象徴的意味が、その後登場してくる。象徴遊戯論の端緒は、ボルノーによれば『人間教育』と同じ年に刊行された小論文「一月半ばの散歩、および子どものそりすべりと氷すべり」にみられるという。

その中でフレーベルは、「幼児や少年の自由な活動の世界は、とくに彼らの遊

戯は、意義深く意味深いものであり、象徴的なものである」としつつ、

「幼児や少年の遊戯とか仕事とか活動とかは、けっして一般に今もなお信じられているように、単に身体的・肉体的な関係を有するにすぎないものでも、またこの身体的・肉体的関係を通して単に間接的に、すなわち強健にすることを通じて精神を発展させるような関係をもつにすぎないものでもなく、また単に活動衝動そのものに外面的に没頭し、それを満足させるという目的をもつにすぎないものでもない。むしろそれらは人間本質、人間精神の直接の要求に起源し、直接それに関係するものなのである⁽¹²⁾」

という。

つまり遊戯には、「人生における結果が存在する」のであり、それは人生の深い本質的特徴を経験するという事象を含むきわめて象徴的な行為ということなのである。この場合、氷の上を一直線にすべるという遊戯は、その運動の背景に、目標に向かって一直線に努力するという人生の一般的かつ本質的な態度を含んでいると考えられる。すなわち、人生における目標の追求という態度は、この遊戯（氷すべり）を通じて経験されるのである。またそれゆえに、「幼児や少年ならびに自己と自己の力、自己の精神的本質をはっきりと感知しつつある青年が、すべり道やその道の上でほとんど疲れることのない」のである。

遊戯は、子どもが自己の世界を樹立するための精神的な原体験としての意義を持つ。氷すべりを通して、子どもは目標追求という原体験を果たすのである。かくしてフレーベルは、このような意義深い遊戯の意味と本質を見極め尊重せねばならないとし、「われわれの子どもや息子のたしかな幸福のために、彼らの遊戯や青少年の自由な仕事を、空虚な無意味な偶然的なものと考えてはならない」と述べる。

以後、フレーベルにとって遊戯は、ただ単に子どもの内的生命を投影したり、表現するものだけでなく、一般的な生命の法則、すなわち「球体法則」⁽¹³⁾を実例で説明するものとなっていった。より具体的には、1830年の『人間教育概要』では「自然が年々歳々、日ごとに、つまり自然界に乱舞するように、象徴的であるごとく、人間の遊戯と生活の祭も象徴的である」と定義したように、遊戯はもはや心理学的な解釈を超えて、人間学的な解釈で捉えられていくようになる。後年フレーベルが展開する象徴遊戯論の基盤はこうして準備されていったのである。

(3)「恩物」の遊戯論

恩物（Gabe）⁽¹⁴⁾とは、いうまでもなく神からの恩寵を意味する。フレーベルは、何よりも自然を通して人間に神を知らせ、神を知らせることによって人間が神のように生きること、すなわち神のように絶えず創造し、生産するようにすることを望んだのであるが、神のように創造する能力の萌芽は、すでに生まれたばかりの幼児にも与えられていると考えていた。教育はただこの萌芽を発展させることであるが、それには適切な遊具が与えられなければならない。幼児は遊具を通して自然やその法則を知り、さらには自然の創造主を予感し、神の働きを知り、やがて自分自身を知るようになる。したがって、その遊具は神の働きを知らせ、宇宙の法則を知らせるために神が賜る恩寵物ということになる。

その意味でフレーベルは、彼が考案した遊具を（神からの）恩物と呼んだのである。荘司雅子によると、フレーベルの恩物の目的とする第1の基本的原理は、子どもに神の働きを知らせること、神のように創造すること、子どもの想像力を呼び起こすことにある。またそれは、幼児が自分の本性に従い、自由に自己活動的に取り扱いうるようなものでなくてはならない、とする。第2の基本的原理は、幼児の活動の連続性である。つまり、次に来る遊びの芽生えがすでに遊びの中に含まれていなければならない、ということである。第3の基本的原理は、幼児のいろいろな能力がそのとき鍛えられることである。認識能力はもちろんのこと、心情や意志も同時に訓練されるのである。フレーベルの恩物の中には、一と多、部分と全体、雑多と統一などの諸原理が含まれ、かつ統一され、これを実際に扱うことにより、3つの基本的な原理にそった形式、すなわち認識の形式、美の形式、生活の形式⁽¹⁵⁾を表現することができる。

そのうちの「第一恩物」は、6色の毛糸（青・緑・黄・橙・紅・紫）でできた直径6センチの6個のボールである。フレーベルが最初に作ったものは乳児期の子どものためのもので、直径3.5センチから4.5センチのものであった。このボールには手に持って遊ばせるのにちょうどよいくらいの長さの同色のひもが付いている。この6色は虹の7色からとったもので、フレーベルによれば、それは最高の平和、天地間の平和、神と人との間の平和の象徴であり、美の統一を表す色である。ボールは最も完全な一個の全体であり、宇宙のすべての形のうちで最

も単純でどの方向から見ても常に同じである。また、ボールの形はそれ自身完全と統一と均整の原理をもち、万物の基本的な形態として宇宙そのものを象徴する。それは自然界においては地球・太陽・月・星などの形の象徴であり、精神的には円満な人格や、人間の理想を象徴する。

第一恩物は、球体法則の原理の展開として把握されるが、フレーベルの遊戯概念と球体法則の結びつきは不可分のものなのである。よって恩物の象徴性を問題とする場合、第一恩物（球体）による遊戯は特に重要である。それは、「子どもに彼と一緒に遊んでいるものの生と愛を感じさせ、認識させ、承認させるとともに、外界の中に内界を、身体的世界の中に力の世界、つまり精神世界を感じさせ、予感させる」もので、世界全体の抽象的な解明のモデルを構成し、提供するのである。

1838年に刊行された「第一恩物—子どもの最初の遊具としてのボール」の手引き書において、後年のフレーベルの遊戯論の本質が展開されている⁽¹⁶⁾。その冒頭では、「遊戯は自己と他者、内的なものと外的なものの生の鏡である」、「遊戯は自然と同様、生の法則を間接的に示す」と記されている。すなわち、遊戯は、縮小されて理解されやすい形で、生命の一般的法則性を表現する象徴的意味を有しているということである。これらの言説は、『人間教育』における冒頭の言葉「すべて天地間の万物の中には、一つの永久不滅の法則が存在し、これが万物を生かし、しかもこれを支配している」という命題を、遊戯において展開したものだと考えられる。

他に、フレーベルの遊戯論の精神をとくに表現しているものとしては「第三恩物」を挙げることができる。第三恩物は、立方体を縦・横・上下を各一度ずつ切って作った3センチ立方の8個の小立方体である。全体を一つの立方体として認識し、直観すること、統一性の中に雑多性を、単一性の中に多様性をみる。その他、数、そして形の要素である面と線と点を認識することができる。子どもはばらばらになったものをひとつにしようと、ひとつにしたものを分解しようとするが、これは子どもの創造的な生命の要求である。建設と破壊、統一と分離を交互にかつ急速に体験できることから、第三恩物は、子どもにとくに大きな喜びを与える遊具として知られている。それは数学的法則性と美しさを示しているが、フレーベルはここでも各々の形式の遊戯の象徴的意味を強調する。すなわち第三恩物に

においては、絶えざる変化の中であって同時に変化せず深く隠れている法則が象徴的に存在する。つまり立方体は分離し細かく変化はするものの、それは立方体としての統一性を有しつつ子どもの前に現れる。それは数学的形式の中に在する法則である。

このようにフレーベルの恩物、とりわけこの第三恩物の根源的形成の意図には純粋数学の思考が強く働いている。そこでは数学的なものの遊具への実践的適用が試みられているのである。彼の敬愛したノヴァーリスは、「最高の生は数学である」(Das höchste Leben ist Mathematik)と表現したが、かくしてフレーベルのロマン主義的思考は、究極的な存在根拠として経験される数学思想を遊戯の中に編み込み、そしてそのための遊具である恩物を通して教育的作用を具現化しようとしたのであった。しかし、フレーベルの遊戯論は、ずっと以前に成立していた理論を恩物において応用したというよりはむしろ、彼が恩物を実際に使用していく実践の中で発展したというほうがより適切であろう。そして、具体的な遊びの最高傑作であるとともに、フレーベル遊戯論の到達点として考えられているのが、1844年に刊行された『母の歌と愛撫の歌』(Mutter-und Koselieder)である。

3. 家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』

(1) 幼児教育と母性愛

1839年5月、フレーベルは最愛の伴侶であったウィルヘルミネ夫人を失った。⁽¹⁸⁾しかしその1ヶ月後の6月、同僚らに励まされたフレーベルは、ブランケンブルクに「幼児教育指導者講習科」を設立し、6ヶ月ごとの講習を行った。この講習科は1844年まで続く。最初は幼児教育に熱心なわずか数名の男性教員が参加しただけであったが、やがて婦人や若い女性も参加するようになった。これらの講習生のためにフレーベルはブランケンブルクの6歳以下の幼児約40名を集めて実習を行った。すなわち、「遊戯および作業教育所」(Spiel-und Beschäftigungsanstalt)と名付けられたこの施設こそが、フレーベル幼稚園の前身といえるものである。⁽¹⁹⁾

夫人の死後、フレーベルは幼児教育と女性との関係をしだいに深く考えるよう

になり、幼児に接するものはその心情からいっても男性より女性のほうが好ましく、幼児教育を女性の天職であり、使命であると確信するようになった。フレーベルによれば

「幼児の生活と、幼児への愛、幼児の生命と女性の心、そして、幼児教育と女性とはもともとふたつのものではなくてひとつである。女性の愛と、母性の愛の中にのみ幼児の生活があり、また幼児を愛することの中にのみ女性の本質がある。幼児の生活を離れて女性の本質はなく、女性の心を離れて幼児の生活はあり得ない」

という。

それにはまず、幼稚園の趣旨を各家庭に知らせ、国全体の家庭そのものを幼稚園化することこそ急務である。全ドイツの婦人や若い女性がその使命をよく自覚し、専心するならば、人間の初期であり、芽生えただけの可能性に富んだ幼児は、自然や神と調和を保ちながら成長することができる。そしてこの理想を実現するためには、何よりも先ず幼児の生活と指導法を十分理解している女性、すなわち幼児教育指導者の養成こそ、重要な課題であるとフレーベルは考えた。そこで彼は、1840年に「一般ドイツ幼稚園」(Der allgemeine deutsche Kindergarten)を創設し、指導者の養成を開始した。

さらに真の人間教育は、学校だけでなく、家庭において、とくに母親によって行われなければならないと考えたフレーベルは、いっそう母性教育に傾倒していく。彼にとって、人間教育の出発点は母となり、敬虔な心を持った母の教育が急務とされた。フレーベルの著書『母の歌と愛撫の歌』は、世の女性らをよき母親に教育するために書かれた家庭育児書である。それは、フレーベル自身のロマン主義的な教育意図のもとに、世の母親たちがこの書を読むことによって、幼いものの心を美しく純粋なものとして成長させ、崇高なものへ子どもを向上させることのできるような、清く美しく高度な精神をうたった内容であり、芸術性に満ちている。

本書の思想的背景としては他にも、根源への回帰、始源的なものへの遡及、出発点への回帰願望といったロマン主義的思考に根ざすものがみられる。フレーベルは、「この生の出発点への回帰はきわめて重要なものであり、細心の配慮をもって注目されなければならないものである」というように、「出発点への回帰」を

人間一般の課題としてとらえようとした。「しばしば回帰することによって、人間はその予感において、本来的かつ真に『自己自身』を獲得するのである」と述べるように、フレーベルは回帰することを失われていく自己を取り戻す手段として考えていた。こうした思考がさらに前面に出てくると、晩年になって自己の半身（最愛の夫人）を失ったこととは無縁ではないだろう。生の根源とそれにより近い幼児および母親といった、いわば始源的存在に傾倒することで、フレーベルは失った「自己の獲得」を目指したのである。

(2)『母の歌と愛撫の歌』の構成

本書は、表紙の扉上に「さあ、私たちの子どもに生きようではないか！」⁽²⁰⁾ (Kommt, lasst uns unsern kindern leben!) という彼が好んだモットーを掲げ、「幼児期の生活を早くから心を合わせて育てるための身体と四肢および感覚の遊戯の書」との副題を持ち、有名なシラー (Johann Christoph Friedrich von Schiller, 1759～1805) の句「無邪気な遊びにもしばしば高い意味がある」⁽²¹⁾ が付されている。

本書は3部から構成されており、第1部は、7首の「母の歌と愛撫の歌」と、そして第2部では49首の「遊戯の歌」、第3部は1首の「むすびの歌」で構成されている。⁽²²⁾ 第1部では「初めての子を見つめる母の感情」、「子どもとひとつの命を感じる母」、「わが子を見て幸福を感じる母」、「わが子と遊ぶ母」、すくすくと育つ子を眺める母、「母の膝に立ち腕に抱かれる時の子と母」など、わが子と遊びながら成長していく子どもを眺める母の喜びの思いを表した歌に、母親が乳児を膝に抱いた1枚の挿絵が添付されている。第2部では子どもの活動や遊戯の意味を母に示す手引きの言葉と、母が子どもに向かって歌うための歌、およびこれらそれぞれの歌の意味を表す挿絵が関連して描かれている。ボルノーによれば、これらの歌は母と幼児が緊密に交わって四肢と感覚を訓練し、さらには予感にみちた象徴的な仕方では幼児を生理解と世界理解へと導き入れるように定められている、⁽²³⁾ という。なお両部とも解説が添えられ、これらの歌や遊びや絵に現れている教育的な意味を、フレーベルは象徴的に説明している。第3部は1首「むすび」のみであるが、「さあ、ばらばらのものから統一のある生きた全体ができますように 摘んだ花を巻いて 香り高い花輪を作りましょう」、「あなたは 人間は全

く統一的な生き物であることがわかり 子どもの中にあなた自身を読むことができました」、「ばらばらのものも合一し あるものは他のものの発展に役立ち 一方は他方の助けとなり支えとなります」とあるように、「生の合一」の概念が繰り返り返し登場する。

『母の歌と愛撫の歌』の1927年版編者であるプリーフェー（Johannes Priifer）は、「この本を生み出した精神⁽²⁴⁾」という標題で本書のあとがきを書いているが、その中でフレーベルが『母の歌と愛撫の歌』について述べた言葉、

「私はこの書の中に、私の教育法の最も重要なものを示した。それは、自然に即した教育のための出発点である。なぜならそれは、人間の素質の萌芽が健全に、そして完全に発達する場合には、いかに育てられ支えられなければならないのかという方法を示しているからである」

を引用し、さらに

「フレーベルの思想の内奥を究めようとする人は、彼の『母の歌と愛撫の歌』を深く究めなければならない。そうすればその人にはフレーベルの才能のすべてが、またこのたぐいまれな人の汲んでもつけない豊かな精神が輝いてみえることであろう」

と記した。

ボルノーも

「フレーベルに関する研究は、たえず繰り返してこの書に戻ってゆかなければならない。というのも、フレーベルの教育思想が、この書において最も簡潔かつ明瞭に描かれているからである⁽²⁵⁾」

と述べたように、フレーベルの他の書物とは全く趣を異にする書物である本書『母の歌と愛撫の歌』はきわめて高く評価されている。それは、家庭という狭い圏内で、母親だけがほとんど唯一の教育者として描かれているものの、そこにはフレーベルによって主張されてきた自然と精神との統一というロマン主義的原理が思想的背景として脈々と流れているからである。

（3）歌と絵について

本書は、カイルハウ学園の協力者であるフリードリッヒ・ウンゲル（Friedrich Unger, 1811～1858）が絵を、ロベルト・コール（Robert Kohl, 1813～1881）

が作曲を担当し、フレーベル自身が本文（詩）を書いたものである。ウンゲルは、ロマン主義情緒溢れる優雅な絵を描き、コールは、フレーベルの短詞にメロディーを付した。フレーベルの詩は決して芸術作品というべきものではない。作詞の際、彼は当時の古い子どもの歌をしばしば改作あるいは補足して用いることがあった。

コールは、アンテルブルクの聖歌隊指揮者の息子としてフライベルクで生まれ、1834年、神学を学ぶためライプツィヒ大学に入学した。そのかわり音楽を熱心に研究し、1838年、牧師となる試験を受けた。その後、1839年から1845年までカイルハウ学園にて宗教教授と音楽の教師として活動した人物である。ただコールは専門の作曲家とはいいがたく、曲そのものについての評価は芳しいものではなかった。そのため、本書が各国に普及する際、コールの原曲とは全く無関係に各国版によって自由に作曲・編曲がなされている⁽²⁶⁾。

ウンゲルは、1811年、ノイホーフで織物職工の息子として生まれた。1825年からおよそ2年間、篤志家の援助でカイルハウ学園で学ぶが、画家を志し、1828年にミュンヘン王室美術学校へ入学した。ここで5年間修行をした彼の絵は「ロマン派画」⁽²⁷⁾の流れに位置づけられている。その後は故郷に帰って暮らしていたが、1837年、ブランケンブルクのフレーベルを訪ね、自分の芸術活動をフレーベルの教育理想に役立てようとした。しかし、フレーベルがブランケンブルクを去ると生活は窮乏し、流浪の生活を強いられることになった。最後にニュルンベルクに嫁いだ姉妹のところで、ようやく住まいとゲルマン博物館での仕事を手に入れたが、数年間の窮乏生活とその間に経験した多くの失望によって精神を病み、ついに1858年、憂鬱症の発作のため自殺した。

『母の歌と愛撫の歌』の絵は、一見してロマン派画の影響を強く受けたことが明瞭であるが、同時にブランケンブルク付近の日常的な風景が多く描かれている。これをプリューファーは、「ドイツ精神生活の一片でもあり、ドイツロマン主義思想の残しえたもの」と述べている。そのなかでもとりわけ美しいのはタイトルの絵であるといわれる。ボルノーも、「おそらく、この書物の中の最も美しい絵は、タイトルの絵であって、この絵それ自体がすでに、フレーベルの生の形而上学⁽²⁸⁾の全体の寓意化された簡潔な要約なのである」と述べている。

この絵の最下部では、ひとりの母親が子どもたちに囲まれながら座り「子どもたちのうちに聡明さと生命の調和にあふれた心とをはぐくみたいと願いつつ、歌

を歌って聞かせている」。その歌に隠された深い真の意味を暗示するかのように母親の右手は天を指さしているが、子どもたちの目はそれを追っているようである。そしてこの中心から子どもの生命が展開しているように、両側面の縁どりに幼い少年と少女が上昇するように描かれ、男性と女性の両極性を体現している。少女は如雨露で庭園に水を注いでいるが、これは女性の使命とフレーベル教育思想における最高の保育形態を象徴している。一方で少年は鳥の生活の様子をうかがっているが、これは外へ目を向けたくましく伸びようとする男性的精神の体現である。つまり、植物の生命と動物の生命とに向けられた二重の連関において、根源的な両極性が体現されているのである。

フレーベルは、「扉の説明」の中で以下のように述べている。

「ここでいっている生命の調和という精神は、存在するものを尊敬し、成長するものをいつくしみ育て、持ち物を大切にすることであるから、その中で育った少女は、植物を優しくいたわることを知っている。幼い子ども、あるいはその子どもの無邪気さを象徴する花といてよいユリに対して、ことさらく面倒をみて水をやっている。また、元気づけてくれるようなこの雰囲気は、たくましく育ちつつある少年に、動く生命のあるものに対する心をはぐくんでくれる。やがては軽い翼で高い空へと飛び立つために発育しつつある元気な鳥の巣に、少年は驚きの目をみはり、じっと注意深く見守っている⁽²⁹⁾」。

ゴシック式小尖塔の両側面やや上部に、少年と少女はさらに成長した姿で描かれている。少年は立方体の上に立っているが、固定した足場である立方体は男性的精神の象徴である。そこで少年はユリの花に手を伸ばし、手元に引き下ろして、花の匂いを楽しもうとしている。それに対して少女は球の上に立っているが、球の自己完結した調和的な形象は、女性精神の象徴である。少女はユリの花を手元に引き寄せて、それを静かに眺めつつ瞑想しているようである。フレーベルによれば、「すでに娘と呼んでもいいほどに成長しつつあるこの少女は、すべての方向に向かいながらもみずからの内にしっかりとした中心を持っている球と同じように、その調和的に発達していく心の中にしっかりと位置を得ている」のである。このように二つの立体の両極性が、男性と女性のそれと連関づけて理解されている。

また、少年と少女のいるゴシック式小尖塔は、下部へいくほど植物の諸要素を多く持っているが、最尖端は、純粋な建築様式になっており、尖端などの頂を飾る十字花飾（Kreuzblume）になっている。ボルノーは、これはおぼろげな植物的生命から、人間的に形成された芸術作品に至るまで、いわば自然界から精神世界への飛躍のない移行、あらゆる存在の統一を具象的に表現したものと解釈する。⁽³⁰⁾

さらに、植物の木の枝によって作られた二つの窓があるが、左側の窓は昼間の太陽が輝いており、右はアリアドネ⁽³¹⁾（フレーベルが好んで用いる生の夜のシンボル）の夜の王冠が輝いている。ここでも宇宙の領域における根源的な両極性が表現されている。上方からは天使が舞い降りてきているが、これは子どもをはぐくむ人間的な母性に対する神からのよいむくいである。

「まごころこめた母親の行為に、最高の尊厳を与えるために、聖霊が鳩の姿になって空から舞い降りてくる。そしてついに雲の間からこういう声が響き渡る『これこそ、生命の庭における、わが心にかなう子どもらのはぐくみである』と」。

ここでは子どもの花園であるキンダーガルテンは、すべての「生命の庭」とまで拡大されている。すなわち生命そのものが、神によって暖かく保護された秩序正しい庭と考えられて、その中で人間は、庇護されていることへの感謝と幸福を感じるのである。ボルノーがこの絵を、「ロマン主義の象徴的表現の意味深長なイメージ」と評しているように、ロマン主義の世界観のすべてがこの絵に織り込まれているといつてよい。

おわりに

最後になったが、フレーベル教育学の形成に影響を与えたと思われるもう一つの思想的潮流、新プラトン主義について述べておきたい。本論で述べたように、フレーベルの考案した恩物やその他の遊戯はすべて、象徴としての機能を持って作られており、「予感」を通して「生の合一」をうながすことがその目標とされた。「生の合一」こそはフレーベルが目指した到達点であり、教育のみならず人間性回復の意味を持っている。しかしこれはフレーベルが独自に創出した概念ではない。じつは「生の合一」という概念はずっと古く、紀元3世紀頃の哲学者アンモニウス・サッカス（Ammonius Saccas）とその弟子であるプロティノス

(Plotinos, 205～270) が提唱した新プラトン主義に遡ることができる。

周知のように、古代ギリシャの哲学者プラトンは、我々の属する物質世界、現象世界の上にイデア界（叡智界）をおいた。このイデアという概念は、プラトン哲学の中心概念ともいえる。イデアとは完全にして普遍、永遠の真実性であり、物体としては捉えられない存在である。人間の感覚的世界の事物はこのイデアを原型とする模造であり、イデアを分有してのみ存在する。イデアは、人間の感覚的知覚の対象とはならず、理性的認識の対象である。新プラトン主義は、この思想をさらに発展させ、従来のプラトン哲学のイデア界以上の究極の原理を求めたのである。

すなわち、このイデア界にも様々な階層がある。そして、この究極の原理を求めるのならば、一切の多様性を取り除いた原理が求められなければならない。これは、多様性どころか存在や思惟すらも超えた場所にある原理でなければならない。これこそが「一者（ト・ヘン）」であり、様々な物に分化する前の統一体でもある。この完全なる「一者」から不完全な現象界、物質界は流出した。「一者」から流出した物は、遠ざかるにしたがって、次第に完全さを失ってゆく。結局、流出した世界は「一者」より、どうしても粗悪にならざるを得ないのである。人間が存在する現象界、物質界が不完全なのはそのためであるという。そして人間は、感覚機能のみに頼ることから、物質的世界にはまり込み、墮落している状態にあるとされた。

「一者」からの流出は、「ヌース（知性、精神、理性。イデアを認識するための理性的能力）」から「魂」を経て、段階をふんで「質料（物質的な存在）」に行き着く。「質料」の中でも一番最低の状態とは、「闇」であり、それは「光の欠如した状態」のことである。「悪」は、こうした欠如した状態の便宜上の呼び方である。人間の「質料」的な側面とは肉体であり、欲望に染まることによって「悪」や「災い」を引き起こす。しかし、人間は本来は天上的な存在であり、その「魂」の故郷はイデア界にある。よって、「魂」を解放してイデア界に帰り、そこからさらに「ヌース」へと高まり、ついには「一者」そのものと合一する。これが究極的な新プラトン主義哲学の目標である。

新プラトン主義哲学は、西欧のあらゆる神秘主義の原型であるといわれるが、まさにフレーベルが要求した「生の合一」や「根源への回帰」は、「一者」への

合一を想起させる。

ここでいうアイデアを認識するための「ヌース」は理性的能力であるが、それは通常用いられる意味での理性ではなく、深く隠された叡知を発見する能力とでもいうべきものである。これもフレーベルがいうところの純粋な人間の心情の中に生きている「予感」、つまり自己の内外の意識的な生と神的なものに対して開かれた、全体性をともなうおぼろげで無意識的な認識の能力に近い印象を与える。さらに恩物の幾何学的形状に顕著であるような、形に神的意味および象徴をみるという態度は、新プラトン主義においても同様である。

古代の叡知として秘かに継承されてきたものをフレーベルがいかにして学び、また教育において生かそうという明確な意図がどこまであったかは定かでない。だが彼の教育思想と実践は、ロマン主義教育の華であると同時に、神と人間の心の間に横たわる深い裂け目を取り除こうとする真に偉大な神秘主義的試みであったともいえるだろう。

注

- (1) フレーベル著、小原國芳訳（1976）『フレーベル全集』 第二巻 玉川大学出版部 150－151頁。
- (2) ボルノー著、岡本英明訳（1973）『フレーベルの教育学』 理想社 178頁。
- (3) 河合隼雄著（1967）『ユング心理学入門』 培風館 121－122頁。 河合は、ある人にとっては象徴的な意味をもって受け取られるものが、ある人にとってはその意味をもたない、すなわち受け取る人の態度いかんによること（個別性）も強調している。一方、フレーベルの象徴論では、それを受け取る子どもの予感の個別性についての記述があまりみられない。
- (4) フレーベル著、小原國芳・荘司雅子監修（1977）前掲書 第三巻 玉川大学出版部 552－553頁。
- (5) ボルノー著、岡本英明訳（1973）前掲書 179頁。
- (6) 長井和雄他編（1986）『ロマン主義教育再興』 東洋館出版社 7頁。
- (7) ボルノー著、岡本英明訳（1973）前掲書 143－144頁。
- (8) フレーベル著、小原國芳訳（1976）前掲書 第二巻 玉川大学出版部 59－60頁。
- (9) 『人間教育』におけるフレーベルの遊戯に関する見解は、晩年のそれとは異なり、子どもが何をして遊ぶか、その遊戯がどのような内容を含むものであるかを大きな問題としていない。
- (10) ボルノー著、岡本英明訳（1973）前掲書 148頁。
- (11) 長井和雄他編（1986）前掲書 東洋館出版社 117頁。

- (12) フレーベル著、小原國芳・荘司雅子監修（1977）前掲書 第三巻 玉川大学出版部 330頁。
- (13) フレーベル教育学において球（Ball）は、万物の姿、つまり精神的かつ物質的世界全体を映し出す象徴的な表現として使用される。彼によれば、あらゆる事物は球的性質を有しているとされる。そして、球的なものとは、統一性から自己展開し、統一性に根拠を有する多様性の表現であり、すべての多様性への統一性への再帰の表現なのであるが、それは、神と人間と自然の三位一体観を暗示する表現でもある。
- (14) 周知のように、フレーベルが考案した子どもの創造的活動衝動に教育意図を与える遊具である。1826年『人間教育』をさらに解説し、その普及を意図して同年に刊行された『教育的家庭、自己教育と他者教育のための週間誌』で紹介、1837年以降、制作販売された。内界の創造衝動を表現する素材「作業具」に対して、形態の分析により外界の認識を取り込むことを目的とする。遊びを通して働きかける乳幼児期の第一系列（第一～六恩物）と、自己学習する少年期の第二系列（第七～十恩物）がある。
- (15) 荘司雅子著（1975）『フレーベルの生涯と思想』玉川大学出版部 194－195頁。
- (16) フレーベルの遊戯論は、1838年を一つの契機としている。すなわち、1837年にブランケンブルクに「児童のための作業教育所」を開設、教育遊具（恩物）を考案し、1838年、その遊具の普及を計るために「日曜誌」（Sonntagsblatt）を刊行している。なお、これらの事実の背景となっている彼の生活史についても注意する必要があるだろう。同時期のフレーベルは、さまざまな国民教育計画が行き詰まったことから、当時のドイツ国家や政策に対して深い憤りを感じていた。そしてそれらに起因した「移住計画」とその断念という苦渋の経験をしている。このような精神的危機の時期が、彼の思想の大きな転換期となり、結果として、より精神的な遊戯の世界に向かわせたとみることできる。
- (17) 表現の実験として数学の世界に足を踏み入れ、そこから理想の学問すなわち「知の記述法」を探求したノヴァーリスは、しだいに学問としての数学から、数学それ自体のもつ表現、世界記述の方法としての数学の可能性へと考察を進めていった。
- (18) 夫人はフレーベルより2歳年上であり、精神生活の上でも生後9ヶ月で母親を亡くした彼女にとっては母親的な存在であった。それゆえ、フレーベルの教育思想の発展には彼女の力が大きいと考えられている。彼女の死についてフレーベルは、「たとえ蒲柳の質であったにせよ、彼女は精神的にさとく、愛において強く、主婦らしい内助の力となることができた。カイルハウ学園において、ウィルソーの学園において、ブルクドルフの学園において、そして最後には幼児の教育に捧げたブランケンブルクの学園において、人類の幸福に対する愛は誰よりも強く、

- 神が彼女に任せた子どもに対する忠実な世話は彼女の人生の最上の喜びであり、彼女の夫の尊い愛に満ちた生涯の事業は、彼女の賜物であった」と、深い悲しみの言葉を吐露している。
- (19) 1837年にフレーベルが開いた「青少年の作業衝動をはぐくむための教育所」が、しばしば幼稚園の前身と誤解されることがある。だがこれは遊具の考案と販売のための事務所であるにすぎず、幼稚園の前身といえるものではない。ちなみに「遊戯および作業教育所」が幼稚園(Kindergarten)と呼ばれるようになったのは、1840年の5月1日からである。また一般には、1840年6月28日が幼稚園の創立日とされているが、これは「一般ドイツ幼稚園」(Der allgem eine deutsche Kindergarten)の創立記念日である。
- (20) この有名な標語は、フレーベルが遊具の制作販売と普及に努めていた1837年8月1日の日記に書かれていた一文である。
- (21) 1799年10月22日、17歳のフレーベルは哲学科の学生としてイエーナ大学に入学する。当時はシラーが歴史を、シェリングが哲学を教授していた。
- (22) 第3部の「むすびの歌」の1首「むすび」を遊戯の歌に含めると2部構成ということになる。
- (23) ボルノー著、岡本英明訳(1973)前掲書 188頁。
- (24) フレーベル著、小原國芳・荘司雅子監修(1981)前掲書 第五巻 玉川大学出版部 265-278頁。
- (25) ボルノー著、岡本英明訳(1973)前掲書 187頁。
- (26) 仏国版(1861)、英国版(1895)、米国版(1906)、日本版(1934)とあるが、そこでの曲は、すべて各国の子どもの歌の影響を受けて、子どもの活動を促すためのものとして、各国それぞれの作曲家の手により作曲・編曲されている。またドイツ本国においても、すでに1883年のF・サイデル版において、ザイデル自身の手によって二声部およびピアノ伴奏曲に編曲されている。そして、20世紀になって最も普及したといわれるブリュッフェ版(1911)では、コールの原譜そのものが削除されている。日本で本書は、1896年『母の遊戯及育児歌』の標題で、神戸頌栄幼稚園から出版されたのが最初の邦訳である。歌詞はきわめて自由な長歌調であり、挿絵は、一応原本の構図に従いながらも日本的な絵に改変されている。その後、1934年に岩波書店から出版されたブリュッフェ編のライプチヒ版は、ドイツ語版からの完訳であり、絵や書物の体裁もドイツ語版と全く同じものである。そして1976年には、キリスト教保育連盟から荘司雅子によるブリュッフェ版が出版された。ただいずれの訳書も、フレーベルが意図したような家庭育児書としては普及しなかった。
- (27) イタリア初期ルネッサンスの素朴で清楚な宗教美を理想とする「ナザレ派」のフリードリッヒ・オーヴァベック(Friedrich Oberbeck, 1789~1869)、ペーター・コルネリウス(Peter

- Cornelius, 1783～1867) を指導者とし、1810年、ローマの聖イシドロ僧院に集まった若いドイツ画家らによって形成されたという。
- (28) ボルノー著、岡本英明訳 (1973) 前掲書 189頁。
- (29) フレーベル著、小原國芳・荘司雅子監修 (1981) 前掲書 第五巻 玉川大学出版部 282頁。
- (30) ボルノー著、岡本英明訳 (1973) 前掲書 191頁。
- (31) アリアドネはクレタ島の豊穡の女神である。アリアドネの語源はクレタ・ギリシア語のari hagne (完全に純粋な) に由来する。

参考文献

- 小笠原道雄著 (2000) 『フレーベル』 清水書院。
- 小笠原道雄著 (1994) 『フレーベルとその時代』 玉川大学出版部。
- 角野雅彦著 (2006) 「19世紀後期におけるキリスト教主義保育の受容と展開―宣教師たちの活動を中心として―」『四国学院論集』123号、四国学院文化学会。
- 金子晴勇著 (2000) 『ルターとドイツ神秘主義』 創文社。
- 河合隼雄著 (1967) 『ユング心理学入門』 培風館。
- 神尾学編著 (2005) 『未来を開く教育者たち』 星雲社。
- シュプランガー著、小笠原道雄・鳥光菜穂子訳 (1983) 『フレーベルの思想界より』 玉川大学出版部。
- 荘司雅子著 (1944) 『フレーベルの教育学』 柳原書店。
- 荘司雅子著 (1953) 『フレーベル研究』 講談社。
- 荘司雅子著 (1957) 『フレーベル』 牧書房。
- 荘司雅子著 (1975) 『フレーベルの生涯と思想』 玉川大学出版部。
- 長井和雄他編 (1986) 『ロマン主義教育再興』 東洋館出版社。
- 西村皓他編 (1984) 『教育の根底にあるもの』 以文社。
- 日本ペスタロッシー・フレーベル学会編 (2006) 『ペスタロッシー・フレーベル事典』 玉川大学出版部。
- ハイラント著、小笠原道雄他訳『フレーベル入門』 玉川大学出版部。
- フレーベル著、小原國芳・荘司雅子監修 『フレーベル全集』 第一巻 (1977) 第二巻 (1976)、第三巻 (1977)、第四巻 (1981)、第五巻 (1981) 玉川大学出版部。
- ボルノー著、岡本英明訳 (1973) 『フレーベルの教育学』 理想社。